



森林レンジャーがゆく (135)

「ナラと共に」

高湿の時期がやってきました。深緑に染まった森の様子は、見た目以上に潜む生き物で忙しく、最も多様性に溢れている時期のひとつです。針葉樹の植林地の割合が高いあきる野においては、市内の森林の3割ほどとされている広葉樹林こそが、その多様性の大半を支えています。樹種が多いほど、多様性も高まります。その中で、どんぐりが実るブナ科の仲間には数多くの生き物が依存し、命を次世代に引き継いでいますが、数年前からの急激なカシノナガキクイムシの増加に伴うナラ枯れの影響で、そのブナ科の様々な樹種が大きなダメージを受けています。ある意味、自然の流れでしょう。近年の記録的高温がキクイムシの分散と関連しているのではないかと、というほど両方は重なっている状況が続くことはどうしても気になります。

ブナ科のコナラやミズナラなどが多い森林には、ゼフィルスと呼ばれるミドリシジミ（チョウ）の仲間が生息し、その多くの種類は梅雨の時期を中心に発生するため、この頃の代表的な生き物です。しかし、ナラ枯れ被害と共に、これらのゼフィルスという「森の妖精」が激減することが考えられます。このため、今年はどれだけゼフィルスが出現するかを注意深く見ておきたいと思いますが、前期の越冬卵を見つける機会がとて少なかったことが気になっています。ホタルほど有名ではありませんが、広葉樹林を高速で飛び回る超小型のゼフィルスたちは正しく梅雨の風物で、この先も存続してほしい生き物であるだけでなく、森の貴重な指標種であるため、いなくなることは「森の悪化」という大きな意味を持つと思います。

あきる野には、白と黒のミズイロオナガシジミ、赤いウラミスジシジミやアカシジミ、翅表がコバルトブルーのオオミドリシジミなどのミドリシジミの仲間がいますが、今年も数多く姿を見せてくれるのでしょうか。

もし、人間の活動が温暖化を加速させているのであれば、それが様々な形で自然に変化を起こし、多くの生き物の絶滅の引き金となっていることが感じられます。目と耳を傾ければ、その悲劇を訴えているのは、メジャーな動物よりも、ゼフィルスのような小さな生き物の方がよほど多いように思います。

(パプロ)



梅雨の広葉樹林の代表的なチョウ ミズイロオナガシジミ